

内、敷地内の駐車場など一五カ所
で電磁波の測定を行ない、改めて「国
の基準内なので問題はない」と強調
した。しかし説明会を重ねるうち、
ほかの住民にもさまざまな異変が起
きていることが判明した。

筆者が直接に取材した住民の主な
声を挙げてみよう。

「昨年春から耳鳴りが始まり、就寝
時に横になると、後頭部にドーンと
衝撃を感じるようになった。階下に
住む親戚の部屋に移ったら症状が和
らぎ、そのまま階下に移って寝起き
している」(二〇階の五〇代女性)

「昨年夏から顔半面がピクピクし、
麻酔を打って切れかけたような感じ
になり鍼治療を始めた。原因不明の
神経麻痺だと診断された。娘も同時
期から目眩を訴え、メニエール病だ
と診断された」(三階の五〇代女性)

「昨年五月から鼻血が出るようにな
った。寝てて、冷たいなどと思って目
覚めると、枕が赤く濡れていた。週
に何度か、風呂で鼻をかんだり、仕
事中にもポトポト滴ったりして出血



新城哲治医師(左)と妻の明美さん。
長女や二女、三女に異変が起き、ほか
のマンション住民にも健康被害が起き
ていることが判明した。

した。耳かきでも血の膿のような塊
が出てくることがあった。耳鼻科に
行っても原因はわからない」(七階の
三〇代男性)

「朝に目覚めて鼻をかむと、血の塊
が毎日のように出始めた。(携帯電話
会社の)住民説明会のあと、夫や中
学生の息子も同じように鼻血を出し
ていたと知った。夫は昨年春以降に
声帯のポリープを患って摘出手術を
受け、息子は胃腸炎にもなった」(九
階の五〇代女性)

「今までずっと健康だったのに、こ
こに越してから夜中に耳鳴りがして
目覚めたり、倦怠感がひどかったり、
味覚障害になって甘いものがわから
なくなったり、肩の関節がやたら痛
んだり、声が嘎れて出なかつたりと
散々だ。森に出かけて車中で寝ると、
体が楽になる。ユタ(霊媒師)を自
宅に呼んでお祓いしてもらったが、
「死霊が重いさ」と言われただけ。
長く飼っていた金魚一匹が死に、新
たに買った二匹もすぐ死んだ」(六階
の五〇代男性)

「一〇年前からメダカを育て、毎年
夏に孵化させて五〇〜六〇匹ほど増
やし、近所に配ってきた。週に一度
は水を替え、エサをあげて「おはよ
う」と声をかける。それが昨夏は
孵化した稚魚が一匹も育たなかった。
大人のメダカも、決まって尾びれの
少し前でくの字に折れ曲がって死ん
でいった。子どもたちに「今年は何

ダカないの?」と聞かれて悲しかつ
た。昨年暮れに残り四匹となったと
き、住民説明会で「部屋の中でも電
磁波の強さが違うらしい」と聞いて、
水槽の置き場所を変えた。今のところ
四匹はまだ生き延びている」(三階
の六〇代女性)

住民の多くは当初、自分の身に起
きた体調の変化を「更年期障害」な
どだと考え、電磁波との関係を疑う
人はいなかったという。

ケータイ基地局は撤去へ

新城夫妻はマンション住民を対象
にアンケートなどによる聞き取り調
査を行ない、四月中旬までに四六世
帯のうち四二世帯から携帯電話基地
局設置前と後での体調の変化を聞い
ている。

調査によれば、四一世帯中二一世
帯で家族の体調に何らかの変化がみ
られた。頭痛や目眩、耳鳴り、関節
痛のほか、鼻血の頻発(八人)や視
力の低下(四人)も共通している。
電球がすぐ切れたり家電が壊れたり
したと訴える住民も少なくない。

「私自身の症状も含め、原因不明の
体調変化がこれだけ多く確認できれ
ば、単なる個々人の特殊体質では説
明できない。多くの症状が二G帯
のアンテナ設置を境に起きているこ
とからも、証明は難しいが、基地局
に何か原因があることは否定できな
いのではないか」(新城医師)

総務省電波環境課によれば、携帯
電話基地局が発する電磁波に対する
日本の規制値は、二G帯未満の周波
数帯では国際ガイドライン(ICN
IRP)を上回る。緩い規制とな
っている。欧州の多くは国際ガイド
ラインに準拠し、さらに厳しい規制
値を設けている国も少なくない。携
帯電話基地局設置によって体調が悪
化したなどと訴える訴訟が全国で起
きているが、回課もその数は把握し
ていないという。

新城医師が住むマンションでの電
磁波測定値は国際ガイドラインをよ
下回るが、それでも沖繩セルラー電
話側は住民側の求めに応じ二月初め
に二G帯の使用を停止し、六月中
旬までにすべての設備を撤去した。
沖繩セルラー電話に取材を申し込
んでみたが、

「携帯電話基地局と健康被害の関係
については、確認されておりません。
基地局の設置につきましては、今後
も引き続き、周辺住民の方のご理解
を賜るよう十分な説明に努めてまい
ります」

との回答だった。

新城医師は今後も住民の体調を診
ながら、携帯電話基地局と健康との
関係についての調査・論考をまとめ、
学会などで発表したいという。

写真撮影/筆者

ふじたともや・週刊朝日記者